



# 『縁故知心』

人と人は、  
因縁という不思議な力があります。  
インターネットの中にも、  
意見のめぐり合わせが繰り返られています。

PSPED BITS



佐谷宣昭 Nobuaki Satani

1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学専攻博士課程修了、博士（人間環境学）。翌月起業。㈱パイブドビット社長CEO。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから、「情報資産の銀行」の必要性を説く。官公庁や都市銀行、小売業など3067の事業者が情報資産プラットフォーム「スパイラル(R)」を提供中。

株式会社パイブドビット  
東京都港区赤坂2丁目9番11号  
03-5575-6601(代表) <http://www.pi-pe.co.jp/>

専門家に負けない解が得られるという。ジェームズ・スロウィツキー氏のベストセラー『みんなの意見』は案外正しい(2004年)によると、20世紀初め、英国の家畜見本市で雄牛の体重を当てる賞金コンテストが開かれた際に、約800人の参加者による推定体重の平均は1197ポンドで、実際の雄牛の体重とわずか1ポンド違いだったという。

集合知が優秀ならば、首相公選制に限らず様々な政策に国民投票を導入したくなる。だが、西垣教授は、安易にネット集合知と直接民主主義を短絡させるのは危険だと言う。数学的背景はコラムの本文を読んで頂きたいのだが、集合知は、唯一の「正解」がある問題には役立つが、メンバーの価値観が多様な状態で、集団としての意見や意志を算出するのは苦手だ。多くの人が選択する以前の問題として、適切に選択肢を並べることが難しいのだ。したがって、政策課題や選択肢の設定作業こそ、多くの人が関わり、集合知を活かすべきということになる。

専門家と素人との境界を取り払い、政策立案と実行のプロセスを記憶するメディアをつくりたい。我々が運営する「政治山」の理念だ。それはネットが政治に貢献するために歩まなければならない道なのだと思う。

## 『専門知と集合知』

11月29日に東京都知事選挙が告示され、12月4日に衆議院議員選挙が公示された。ダブル選挙の投票日は12月16日だから、このコラムが掲載される頃には新しい「首都の顔」と「日本の顔」が選ばれていることになる。

現行の選挙制度では、知事は有権者による直接選挙で、首相は国会議員を介した間接選挙で選ばれるが、これまでに何度か首相の直接選挙が検討されてきた。1961年に中曽根元首相が国民投票による「首相公選制」を提唱し、小泉元首相は2001年から1年かけて「首相公選制を考える懇談会」を開催している。首相公選制が検討される動機は2つで、1つは首相の民主的正統性の問題だとされる。与党の党首選挙が事実上の首相選挙となるため、国民とはかけ離れたところで決定される感が強い。もう1つは、首相と内閣の指導力の問題だとされる。首相や閣僚は頻繁に交代するため、内閣が政府を十分に指導できず、大胆な政策が展開されにくい。こういった閉塞感の打破はもちろんなのだが、首相公選制を求める声の背景には、国民が政治家や官僚などの限られた専門家による統治を嫌い、透明性を求める意識も影響している。

少し前になるが、10月31日の日経新聞朝刊に掲載されていた、東京大学の西垣教授による専門知と集合知に関するコラムが興味深いので紹介したい。

福島第1原発事故で、当初テレビで軽々しく安全宣言していた専門家の言葉に不信感を抱いた人は多い。つまり、今回の事故でアカデミックな「専門知」に対する人々の信頼感は大きく低下した。

その一方で、ネットの「集合知」への期待が高まっている。素人であっても衆知を集めれば